

## 1 2月選評

ああ此処は　なんて静かで  
寂しくて　誰も私を  
殺さない場所

モラン（神奈川県）

言葉の強さというのはあるのかもしれない。少し生々しすぎて採らなかった作者の作品に「雪の日に　鍵を探して／ふと気付く　母は私を／憎んでいた」というのがあるが、双方の作品から感じるのは、それらの言葉は、作者において、どうしても吐き出されなければならなかった言葉かもしれないということである。もしそうならば、書き手は書くことによって救われたのかもしれないと思う。また、書き手を救った作品が時には読み手を救うことも、そして、読み手の人生の支えの一部となることも確かにあるに違いない。

大欠伸するとき胸にある花野

さいう（愛知県）

「大欠伸」、「花野」、それらの言葉が飛び跳ねている。この作者の作品は読んでいて率直に楽しい。それは生の実感をストレートに甘受していることから生まれてくるもので、ほかの作品も挙げておくので、皆さんにも楽しんでほしい。「生きている間に／なんど／人の死に触れるだろうか／／雪落ちる街」「とれたたのレタスを剥けば／しゃりしゃりと／両手に海の音があふれる」「フルーツに／あわいひかりを吹き込んで／友が背中に受ける夕暮れ」

玄関の芳名帳と白日傘

中矢　温（東京都）

静けさを書くこと。それが中矢温のテーマなのかもしれない。玄関の芳名帳ということは葬式の参列の場面だろうか。ただそこに置かれる白日傘は明らかにアンマッチであろう。しかし作者は現実世界との亀裂から生じる静けさの方に意味を見出しているように見える。作者のほかの作品に「二次会を抜けて本屋に檸檬を置く」や「文字盤に雪を降らせる遊びらしい／塾通い詰め真白な手首」というのがあるが、描かれるのは日常のなかに敢えて非日常を置くことで一変する風景である。そこに生じる静けさというのは、作者のどうしようもない空白の表れなのかもしれない。

「詩人って  
ポケットの中に  
入りそうだよね」  
「ね。」

からすまゑ（神奈川県）

シュールな語り口はこの作者の持ち味だろう。言葉の魔術師のような詩人、たとえば藤富保男のことを思い出す。こういう作品に解説は不要なので、私もポケットの中に入りそうなものを考えたいと思う。同じ作者の作品に「僕たちが周りに与える色のこと／昼の探偵 夜の探偵」や「歩道橋／無数の手が／振り下ろされるように／ある空」といったものがある。

にせんにじゅういちねんを水飛沫  
あげて渡ってくももいろのくじら

藤ほたる（神奈川県）

ももいろのくじらは自身の投影であろうか。作品からは物語が感じられる。夢のなかのようで、それでいて現実味を帯びるのは、作者の心象が、その物語にうまく投影されているからだだろう。同じ作者の「長生きは望まないからタンポポの／綿毛みたいな性器ください」や「すいーとぽととって言ってしろく／なる息きえるのはみんなさみしい」といった作品においてもそれは同様である。

雪の降る音のように壊れていく日  
をあなたが縫い合わす もういい

白野（新潟県）

壊れた日を縫い合わしつづけるあなたとは誰のことだろう。そして『雪の降る音のように壊れていく日』とはどんな日だろう。かつて作者の作品を青春の屈折と評したことがあったが、その印象は今でも変わらない。他者と自己の亀裂をあらわにしつつ、投げつけるように書くことでしか表現できないものがあるのだろう。ぎりぎりの感情を言葉にしようとする比喩は、ほかの作品にも見られる。「好きでもなく嫌いでもない人と／いて硝子が喉を出られない夜」「気管支のひりひりだけが正論の／潮風なんて馬鹿のやること」「幸福と同じくらいに切り傷な／六畳一間眠れテレキャスター」など。

透き通る眼差しだった  
子どもらが雪を踏むとき

死ねと言うとき

まちりこ（埼玉県）

子どもの純粋性と残酷性を硬質な表現で詠っている。それがリアリティを持つのは誰しもが子どもであることを経験してきているからだろうか。